

Economic Indicators

発表日: 2024 年 9 月 6 日 (金)

景気動向指数(2024 年 7 月)

～CI一致指数は上昇も、一進一退の域を出ず。基調判断は「下げ止まり」で据え置き～

第一生命経済研究所

シニアエグゼクティブエコノミスト 新家 義貴

(TEL: 050-5474-7490)

C I 一致指数は上昇も、一進一退の域を出ず

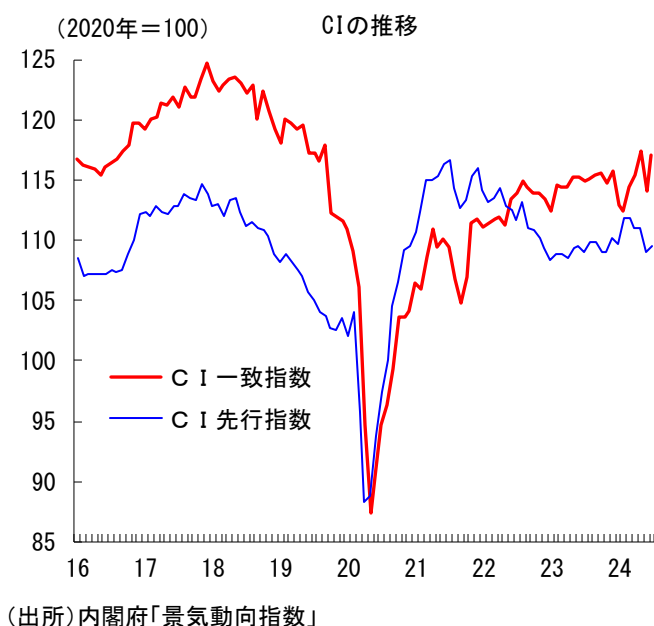
内閣府から公表された 2024 年 7 月の景気動向指数では、C I 一致指数が前月差+3.0 ポイントと 2 ヶ月ぶりのプラスとなった。上昇幅は大きい、前月の大幅低下（前月差▲3.4 ポイント）からの反動の面も大きく、均してみれば一進一退の推移と言って良いだろう。7 月の内訳では、投資財出荷指数や生産財出荷指数、卸売業販売額などの押し上げ寄与が大きい。

基調判断は「下げ止まり」で据え置き

C I 一致指数の基調判断は「下げ止まり」で据え置かれた。7 月の上昇により、3 か月後方移動平均前月差、7 か月後方移動平均前月差ともプラス圏に浮上したが、「7 か月後方移動平均前月差の符号がプラスに変化し、プラス幅（1 か月、2 か月または 3 か月の累積）が 1 標準偏差分以上」という「上方への局面変化」への上方修正基準は満たさなかった。

なお、8 月分の C I 一致指数が前月差+0.8 ポイント以上であれば、基調判断は「上方への局面変化」へと上方修正されることになる。もっとも、C I 一致指数と関係の深い鉱工業指数において、経済産業省による 8 月の予測指数の補正試算値は前月比▲0.9%とマイナスとなっている。8 月に基調判断が上方修正される可能性は否定されないが、現時点では据え置きとなる可能性の方が高いだろう。また、9 月の予測指数も前月比▲3.3%となっていることから考えると、基調判断の上方修正は 10 月以降に持ち越しということになるのではないだろうか。

景気は先行き回復が見込まれてはいるものの、回復ペースは鈍いものととどまる可能性が高いとみている。この先の景気のカギを握る個人消費について、実質賃金のプラス転化が好材料ではあるものの、物価の高止まりが続くことの影響で増加幅は今後も抑制される。また、これまで 2 年以上低下が続いたことで実質賃金の水準は非常に低く、多少の賃金増加が実現したからといってすぐに消費意欲が戻ることは想定しにくい。実質賃金の多くが貯蓄に回る可能性に注意が必要だろう。外需についても、米国経済の減速が予想されるなか、緩やかな増加にとどまる公算が大きい。先行きの景気回復ペースについては慎重に見ておきたい。



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

